

的確な政策評価とその公表を

森昭三

元筑波大学副学長(体育科学系教授)

現びわこ成蹊スポーツ大学学長

美しい・すばらしい大学

筑波大学で20年弱に亘って研究・教育活動に従事したが、平成8年度から10年度の2年間は厚生補導担当副学長を務めた。正確に言うならば、2年間の前半がそうであり、後半は名称が変わり学生生活担当副学長であった。

私の職歴は、東京教育大学に始まり、岡山大学、筑波大学、岩手大学、そして現在は私学であるびわこ成蹊スポーツ大学に及んでいる。こうした経験のみならず、学会や研究会などで訪れた国内の多くの大学と比較して言えることは、筑波大学は美しい、そして時代を先取りしたすばらしい大学であったということである。現在もそうであろうが、ここで「あった」と過去形で表現したことには、特定の意図があつてのことではなく、定年退官後のここ5年間ばかりの筑波大学の動向をほとんど知らないからである。

贅沢な大学

確かに、筑波大学は美しい・すばらしい大学であると言える。しかし、見方を変えるならば、すべてにおいて“贅沢な”大学とも表現できるのである。こうした表現が筑波大学の教職員との会話の中に自然に出てくるのであるが、いままでにそんなことはない、と強く否定された経験はない。

一例をあげておくならば、私が所属していた体育科学系には110人を超える教員がいたし、数多くのスポーツ施設をもっていた。ただし、屋内スポーツ施設に冷暖房の設備もなく、芝のサッカー場もなかったのはお粗末であった。

また、副学長として担当した学生部についてみれば、学生課、就職課、厚生課の3課があり、それぞれに専門職員が配置されていた。

大学の規模からみて教職員、施設、そして組織といい、これだけ条件の整っている

国立大学は少ないに違いない。ただ最近、私立大学を訪れる機会が増えたが、大規模な私立大学には太刀打ちできないところがある。特に、キャンパスのアメニティにおいてである。

先に「贅沢な」大学とやや皮肉な表現をしたことには、こうした恵まれた状況・条件にありながら、本当にそれなりの成果をあげていたのだろうかとの疑問からである。もし成果をあげているならば、「贅沢な」という表現は妥当性を欠くことになる。言い換えるならば、こうした状況・条件のすべてが十分に機能しているという合理的な関係にあるならば、大学が果たすべき教育、研究、社会サービスのそれぞれの側面においてもっと成果をあげることが可能であったのではなからうかとの自問でもある。

今日の表現を使えば、社会に対する「説明責任 (accountability)」の問題でもある。

本来、こうした“贅沢な”というようなことは、実態把握 (調査データ) を踏まえて検証すべきことなのであろうが、そうしたことに必要なデータがないので、成果があがっていなかったようにおもう、と表現せざるを得ない。

今回、執筆を承諾したことには、誤解があるかもしれないが、こうしたことの実態把握や実証の必要性を指摘しておきたかったからである。

実態把握を欠いた改革論議

副学長の前に、体育専門学群長をしていたころから全学的な改革委員会が動き出していた。改革の方法論に疑問を投げかける教員はいたが、正面から改革を反対する者は少なかったようにおもう。改革が必要との認識は共通していたのであろう。(否、当時、大部分の教職員にとって、改革といった問題は遠い存在であったとおもうのである。)

しかし会議は、抽象的な理念討論の堂々巡りに終始するか、かみ合わない観念論に終わることが少なくなく不毛なところがあった。いま考えるとそれは、議論の質を高めるための実態分析がじゅうぶんになされていなかったためか、なされてはいたがじゅうぶん活用されていなかったために、改革の具体的な手立てを考えることができなかったことによるといえるだろう。どのような問題があり、どのような取り組みをすると、どのように改善されるのかが見えてこない議論であった。

『教育社会の設計』という本の中で、著者の矢野真和東工大教授 (当時) は、「実態分析を主軸に、理念と政策との三者関係を論理的に位置づける作業が、教育改革を『実』のあるものにする作法だ」と、「理念・実態・政策」の三者を有効に結びつけなければならぬと述べている。

言うまでもなく、大学改革の成果があがるまでには、長い時間がかかるものである。

それだけに、政策の有効性を判断するための正確な現状分析と、絶えざる政策評価の研究とが求められるのである。

成果を評価し公表すること

会議の多い大学であった。特にそう考えるようになったのは、教授になってからであった。しかしこのごろは、どこの国立大学を訪れても、会議、会議で追い回されているという。

多くの会議を重ねて決定し実行したことが、どれだけの成果を収めているか、あるいは収めることが可能かを明らかにしないことが、と言うよりも、透明性のある成果の把握・評価がじゅうぶんになされていないことが、会議が多いという批判ともなっていたようにおもう。つねに評価がなされ、フィードバックによる改善が必要なのである。もちろん、成果の把握と同時に問題点や限界も指摘することも大切なことである。

また、こうした成果や見通しの公表がないことが、その経験を共有できず多くの教員の無関心さを助長させていたとも考えられるのである。

それにしても、近年の大学改革は実質的な点検を省略して、とにかく新しいものに取り替えることを正当化する力をもっているようにおもえる。そうした言葉の魔力に蹂躪されているのが、近年の大学改革のた

めの会議のようにおもえてならない。したがって、現実を引っ張る力を失っているようにもおもえる。

こう書きながらも、それはまったくの誤解である、とのお叱りを受けることを願っている。

学生生活の充実：キャンパス・アメニティ

最後に、執筆への依頼は学生生活について述べるのが期待されてのことであろうから一言触れておきたい。

先に、いささか批判的に改革委員会について述べたが、当時から委員会に「生活環境専門委員会」を設けていたのはすばらしいことであった。まさに冒頭にとりあげた“すばらしい大学”なのである。

当時の課題は、(1)学習環境、(2)交通問題、(3)宿舎生活の3つにあった。これらの課題がどの程度改善されたかはしらない。

キャンパス・アメニティと言えば、本誌が重要な役割を果たしていたのを記憶している。特集が組まれたのであるが、総合大学の強みでいろいろな専門家の視覚から論じられていた。それらは、この問題へ教職員の関心を引きつけたばかりでなく、改善への道標ともなったとおもうのである。本誌が、こうした役割を果たし続けて欲しいとの期待を述べて纏めとしたい。

もり てるみ